

目的 適合度の高い袖型を作成することを目的として、レプリカによる平面展開図より腕の体表面積、および、体表面近似展開図を作成して、腕の構造の把握と、衣服の袖の図形との共通性、適合度を検討した。

方法 資料は、19~22歳までの青年女子36名の身体計測票と、同一個体についての腕レプリカの体表面積と平面展開図、並に、文化式袖型の仮ぬい、試着、補正したもの(1976年に計測、採取)である。腕に関する身体計測値11項目と、レプリカの展開図を原型状に修整した体表面近似展開図より43項目、原型より35項目の測定を行った。更に、体表面積より腕を覆うに必要な大きさや形態の把握を行い、適合度をみるために袖の原型と、腕の体表面近似展開図を、袖幅線と、袖山線を基準として同一紙面上に転写し検討した。

結果 身体計測値、体表面近似展開図値、原型値を比較するために、袖に関する項目をそれぞれについて平均値の差の検定を行ったところ、身体計測値、体表面近似展開図値、原型値のそれぞれに共通して1%の危険率で有意差の認められたのは、前腕最大囲、手首囲、肘丈であった。原型値と身体計測値の差は、上腕最大囲の平均値4.4cm、前腕最大囲もよく似た数値であるが、袖丈、肘丈にはほとんど差がみとめられなかった。腕体表面積と同一個体から採取した胸上部面積(57年発表)との比較を試みたところ、腕体表面積が大きい被験者は、胸上部面積も大きいが、しかし、腕体表面積が小さい被験者は、胸上部面積は小さい傾向を示さなかった。腕体表面積と胸部の計測値に相関の高い項目がみられるので、腕の形態の把握と共に、胸部との関連において検討する必要があると思われる。